

# 「明智光秀 ～謀反人の言い分」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

## 1. 最大のミステリー「本能寺の変」

### 「敵は本能寺にあり！」

歴史ファンに限らず、この言葉を知らない人はいないのではないのでしょうか。1582年に起きた「本能寺(ほんのうじ)の変」。この大事件によって、我が国の歴史は間違いなく激変しました。

その「主役」の一人は、もちろん討たれた織田信長(おだのぶなが)ですが、信長を討った謀反人(むほんにん)たる明智光秀(あけちみつひで)も、本能寺の変によって我が国の歴史に永遠にその名を残しています。

しかし、これだけの大事件にもかかわらず、本能寺の変において「光秀がなぜ信長を討とうとしたのか」という動機が現代に至るまで解明されておらず、日本史、いや世界の歴史全体からしても最大のミステリーのひとつとされています。

また、光秀が信長を討って天下取りに事実上名乗りをあげたにもかかわらず、わずか10日あまり後に羽柴秀吉(はしばひでよし、後の豊臣秀吉=とよとみひでよし)率いる軍勢に大敗し、逃げる途中で落武者狩りの竹槍(たけやり)に致命傷を負わされて自害したとされています。

いわゆる光秀の「三日天下」と伝えられています。勝負は時の運とはいえ、なぜこれほどまでに呆気(あつけ)なく倒されてしまったのでしょうか。

今回の講座では「本能寺の変」前後の光秀の行動をたどりながら、信長を倒すまでに至った経緯や、その後の展開を探ってみたいと思います。

光秀が信長を討った理由として昔から挙げられている説のひとつに「怨恨説(えんこんせつ)」、つまり「光秀が信長に深い恨みを抱いていた」というのがあります。

小説や映画、テレビドラマなどで昔から様々に描かれてきておりますが、実はこれらは江戸時代以降の講談などをもとにつくられており、信用できるものではありません。

また、光秀が本能寺の変の直前に信長から毛利家(もうりけ)征伐のための出陣を命じられた際に、領国

である丹波(たんば、現在の京都府中部および兵庫県東部など)を没収されたという説もあります。新たな領地は毛利家を倒して自力で奪え、という信長の激励(?)であったとされていますが、これも変な話です。

光秀は信長の家臣でありながら、この頃は既に国持大名でもありました。いくら主君とはいえ、これから攻めようとする光秀に対して、何の落ち度もないのにいきなり領国を没収するというのが果たして可能なのでしょうか。まして「領国を没収＝路頭に迷わす」という厳しい条件の下で戦わせようという滅茶苦茶な作戦を、信長が採用するとは考えられません。

それでは、なぜこのような怨恨説がまことしやかに囁(ささや)かれ続けてきたのでしょうか。

我々は、動機の見つからない不可解な事件が起こった際に、真っ先に「何か恨みがあったのか」と考えがちです。そして、その動機がどうしても分からないときには、加害者が被害者に抱いたであろう「恨み」を勝手に想像してはいないでしょうか。

詳しくは後述しますが、信長と光秀との主従関係を冷静に見れば、光秀が信長に弓を引くなど考えられません。にもかかわらず、その考えられないことが実際に起こってしまいました。だとすれば、信長が今まで受けた恩を仇で返すほどの恥辱(ちじょく)を光秀に与えたと考えがちではないでしょうか。

すなわち、事件後に加害者の気持ちになって「逆算」したうえで「恨みがあったからこんな事件が起こったんだ」と自己満足して終わり、としてしまうことがよくあるのです。光秀の怨恨説も、こうした「逆算の論理」によって後世に考えられたものが大半であると推定されます。

しかし、光秀に諸説のような怨恨がなかったとしても、光秀が信長に対して「このままではついていけない」と考えてもおかしくない「流れ」があったことは私にも想像できます。この「流れ」をたどるために、彼の半生を簡単に振り返ってみましょう。

## 2. 理想的な主従関係から一転して生まれた「不信心」

明智光秀は清和源氏(せいわけんじ)の流れをくむ土岐氏(とぎし)の分家である明智氏の一族であるとされていますが、生年ははっきりせず、若い頃は諸国を流浪(るろう)して生活していたと伝えられています。

やがて越前(えちぜん、現在の福井県東北部)の大名であった朝倉義景(あさくらよしかげ)に仕えて、後に15代将軍となった足利義昭(あしかがよしあき)が朝倉氏を頼ると、光秀は義昭の側近であった細川藤孝(ほそかわふじたか)と親しくなりました。この二人が厚い友情で結ばれていたことは、後の大きなポイントになりますので記憶しておいてください。

義昭が上洛(じょうらく、京都へ向かうこと)を希望しても義景が越前を動かさなかったため、義昭は織田信長を頼るようになりました。信長は美濃(みの、現在の岐阜県南部)を統一した後に上洛し、義昭を将軍に立

てることに成功しましたが、この頃までに光秀は信長の家臣になったと考えられています。

光秀には、和歌や茶の湯をよくするという教養人の一面がありました。このため、信長は光秀に朝廷との交渉を任せるなど次第に重用し、1571年の比叡山延暦寺(ひえいざんえんりやくじ)の焼討ちなどで戦功を挙げた光秀に対し、近江(おうみ、現在の滋賀県)の一部を彼に与え、坂本城(さかもとじょう)を築かせて京都や比叡山の抑えとしました。

信長の多くの家臣団の中で、浪人から新規に取り立てられてわずか数年しか経っていないにもかかわらず、光秀は早くも一国一城の主になったのです。しかも同じように浪人から採用された秀吉よりも出世が早かった(秀吉が同じ立場になるのは2年後です)わけですから、信長の光秀に対する厚遇ぶりと、光秀の信長に対する感謝の思いがよく分かります。

その後も光秀は各地を転戦して武功を挙げ、前述の丹波も領地に加えました。地図を見れば分かりますが、丹波は京都のある山城(やましろ、現在の京都府南部)の真上にあります。つまり、信長は全国統一に向けて戦略上重要な位置にある国を、光秀に一任しているのです。

また、信長は自分の家臣をいくつかの軍団に分け、それぞれに地方の攻略を命じていましたが(例えば羽柴秀吉は中国地方を担当)、光秀は「遊軍(ゆうぐん、待機している軍勢のこと)」として常に自分の手元においていました。

一見すると手持ち無沙汰(ぶさた)のように見えますが、有事の際には各武将の援護のために真っ先に駆けつけるわけですから、攻撃力も防御力も同時に備えていなければなりません。そのような難しい軍団を、信長は光秀を信頼して任せていたのです。

ここまで振り返ってみると、光秀が自分をそこまで信頼してくれている信長をどうして裏切ったのか、ますます理解できなくなりますよね。後世の人間が苦しまぎれに怨恨説を「つくりあげた」背景も、分からなくはありません。

しかし、人間というものは、いくら物量や恩で満足していても、気持ちの中で何がしかの不信感を持ってしまうことがよくあります。それは光秀とて例外ではなく、信長の見せた行動の中から「このままでは信長様についていけない」と思わせる「何か」が芽生えた可能性が高いのです。

では、光秀に不信感を与えた信長の行動とは何だったのでしょうか。

ところで、皆さんは若い頃の信長が「非常に甘い」武将であったことをご存知でしょうか。何度も裏切ろうとした実弟の織田信行(おだのぶゆき)を殺害したことを除いては、一時は信長に逆らった武将であっても助命しているのです。例えば、信行側についた柴田勝家(しばたかついえ)らも許していませんし、美濃の斎藤氏(さいとうし)を滅ぼした際も、当主の斎藤龍興(さいとうたつおき)は追放されただけでした。

しかし、妹の婿(むこ)であり、絶対的な信頼を寄せていたはずの浅井長政(あざいながまさ)の裏切りにあ

ってからは、信長の人格が大きく変化していったと考えられます。浅井長政を滅ぼした後に、父の浅井久政(あざいひさまさ)や朝倉義景とともに、そのドクロを漆塗(うるしぬ)りにして金粉(きんぷん)をまぶした薄濃(はくだみ)にして、それらを肴(さかな)に酒を飲んだ、という記録が残っているからです。

こうした信長の姿勢は、天下統一が近づいて自分に正面切って敵対する人間が少なくなった 1570年代の後半からより顕著に、そしてよりエスカレートしていきました。古今東西の絶対的な権力者の誰しもが陥(おちい)りがちな「独裁者の罟」に、信長もはまってしまったのです。

そして 1580 年、信長は古来の重臣であった佐久間信盛(さくまのぶもり)や林通勝(はやしみちかつ)を、過去の不行跡を理由に領地没収のうえ追放処分にしました。追放の真の理由ははっきりしていませんが、この頃までに「独裁者」ともいえる実力を持っていた信長に対して、否応(いやおう)なしに恐怖感を認識させた事件でもありました。

信長によるこうした狂気じみた行動に対して、光秀をはじめとする家臣たちは「明日は我が身か」とおびえるとともに、信長の手法についていけないという考えを持つようになりました。

また 1581 年には、京都において正親町(おおぎまち)天皇ご臨席のもとで、一種の軍事パレードともいべき「馬揃(うまぞろ)え」が行われました。信長が自分の力を周囲に誇示するために行われたというのが通説ですが、その一方で朝廷に対する圧力もあったとされています。

信長は豊富な資金力で朝廷を手厚く保護する一方で、朝廷の力を利用して自己の天下統一を有利に進めていました。例えば先述の石山本願寺の攻略も、正親町天皇の命令で本願寺側が石山を退去することで決着しています。

「金を出すは口も出す」。朝廷に対する信長の態度はいつしか尊大になり、やがては正親町天皇と対立するようになった信長は天皇に譲位を迫り、反対された天皇に対して威嚇(いかく)の意味を込めてわざわざ馬揃えをしたという説もあるのです。

光秀は早くから朝廷と通じ、交渉役として奔走(ほんそう)してきましたが、信長の朝廷に対する態度は、そんな自分の今までの血のにじむような努力を無にしてしまいかねない、とんでもないものに見えました。光秀に朝廷に対する尊敬の思いがあったかどうかははっきりしませんが、少なくとも自己の努力を否定しかねない信長の行動に対しては「ついていけない」と不信感を抱いたことでしょう。

また、これは光秀に限りませんが、皇室に対する不敬な態度や、足利将軍家に対する追放という仕打ちなど、信長による数々の行動が、当時の日本人からすれば「異常」に見えました。来たるべき新しい時代に向けての信長なりの秩序が、光秀には受け入れられなかったのです。こうして信長に対する不信感が募(つ)っていく中で、光秀の心の中に「爆弾」がつくられていきました。

しかし、これらの「ついていけない」思いだけで、光秀が信長への謀反を決意したとしても、すぐに行動を移したとは考えにくいのが現実です。不信感は確かに爆弾と化していきましたが、肝心の

「導火線に火がつく」までには至っていませんでした。では、その「火がつく」きっかけとは何だったのでしょうか。

### 3. 本能寺の変の「黒幕」は誰か？

ところで、事件後に実行犯を捜索(そうさく)する際の名言に「事件後に一番得をした者を疑え」というものがあります。この格言を「本能寺の変」に当てはめれば、誰が一番得をしたといえるのでしょうか。

羽柴秀吉の名前が真っ先に浮かびそうですが、彼はむしろ「被害者」になりかけています。光秀の毛利家に対する使者が秀吉側に捕まったことによって、秀吉は信長が暗殺されたことを初めて知りました。その後、急いで毛利家と講和して引き返しましたが、もし毛利家が信長暗殺を先に知っていたら、彼は中国地方に釘付けになっていたことでしょう。そんなリスクのあることを、秀吉が行うとは考えられません。

本能寺の変によって一番得をしたのは、実は四国の長宗我部元親(ちょうそかべもとちか)でした。信長はそれまで講和を結んでいた長宗我部元親を征伐する決意を固め、三男の織田信孝(おだのぶたか)や家臣の丹羽長秀(にわながひで)らに攻めさせる準備をしていました。しかし、その直前に本能寺の変が起こったため、元親は滅亡を免れたのです。

この四国征伐こそが、光秀に謀反を決意させる「爆弾」でした。なぜなら、信長と元親との間で和平の交渉を続けていたのが光秀だったからです。元親は早くから信長と同盟を結び、光秀の家臣の斎藤利三(さいとうとしみつ)の義理の妹を嫁にもらって、生まれた長男を信長にあやかって「信親(のぶちか)」と名付けました。

こうした長年の苦勞で磐石(ばんじゃく)になったはずの同盟関係を反古(ほんこ)にされたばかりでなく、いくら義理とはいえ、家臣の妹と甥(おい)を討たれる立場になった光秀は激しく動揺しました。

「信長様の考えにはもはやついていけない」。従来の秩序こそが正しいと考え、信長の行動が理解できなかった光秀の中に芽生えた不信感によって生まれた爆弾が、長宗我部氏に対する仕打ちによってついに導火線に火がつき、音を立てて爆発してしまったのです。

信長の命令で秀吉の毛利家征伐の先導を任された光秀は、1582年旧暦6月1日の深夜、軍勢を率いて信長が宿泊していた京都の本能寺を急襲しました。信長は、わずかな家臣とともに奮戦しましたが多勢に無勢でどうしようもなく、最期には自害して果てました。享年49歳、まさに「人間五十年」の生涯でした。

こうして信長を討ち取って、天下取りにその名をあげた光秀でしたが、その後の展望については現代でも不明のままです。わずか10日あまりで死んでしまったゆえの事情もありますが、それ以上に、彼にとっては「身内」ともいえる武将の裏切りが大きく響きました。

光秀には先述の細川藤孝という親友がいました。藤孝の息子である細川忠興(ほそかわただおき)は、光秀の娘である珠(たま)を嫁に迎えており、光秀は藤孝が当然自分の味方をしてくれるものと信じていました。

しかし、光秀の期待に反して藤孝・忠興父子は光秀の誘いを断り、藤孝は髪を切って出家し、忠興は珠を領国内に閉じ込めてしまったのです。驚いた光秀は自筆の書状で説得しましたが、受け入れられませんでした。

また、光秀と縁の深かった武将である筒井順慶(つついじゅんけい)も、光秀の誘いに対して色よい返答をせず、光秀は京都の洞ヶ峠(ほらがとうげ)まで出陣して参戦をうながしましたが、結局順慶は動きませんでした。ちなみに、日和見(ひよりみ)するという意味の「洞ヶ峠」の故事はこれが由来です。

細川藤孝・忠興父子にせよ、筒井順慶にせよ、彼らが動かなかったのには大きな理由がありました。それは、本能寺の変が「光秀自身によって単独で行われた」からです。

本能寺の変については、昔からいわゆる「黒幕」の存在が有力視されてきました。前述の羽柴秀吉や徳川家康(とくがわいえやす)、前将軍の足利義昭や朝廷、中にはカトリックのイエズス会の存在を挙げる人もいますが、私はこれらの「黒幕」がいたとは考えてはおりません。

もし黒幕の存在があれば、例えば光秀が細川藤孝・忠興父子に送った書状の中でその名前を書くことによって、細川父子に味方につくように説得できたかもしれませんし、また前述の毛利家に対しても、黒幕の存在を事前にほめかして秀吉軍を釘付けに出来るように依頼できたはずですが、もしこれらが実現していれば、光秀がわずか 10 日あまりで討たれてしまうようなこともなかったでしょう。

また、本能寺の変と同時期に、信長の長男である織田信忠(おだのぶただ)も光秀に攻められて自害していますが、本能寺が襲われた際には、信忠が宿泊していた妙覚寺(みょうかくじ)は、まだ光秀軍に囲まれていませんでした。

信忠には京都を脱出して岐阜や大坂に向かい、父親の仇を討てるチャンスが実はあったのです。しかし、父親の救援などに時間をとられているうちに光秀軍に攻められてしまい、最期には逃げ切れずに自害しました。

信忠を生かしておいては、せつかく信長を倒しても光秀の天下取りに支障が出るのは必至ですし、何よりも黒幕が存在していれば、信忠の寝所を囲まないという大失態を光秀にさせるはずがありません。この点からも、本能寺の変は「光秀の単独犯行」と考えられるのです。

さらに、仮に黒幕がいて、事前に信長の暗殺が計画されたとすれば、おそらく本能寺の変は実現しなかったとも思えるのです。なぜなら、信長という人物は稀代(きだい)の「逃げ上手」だからです。

## 4. たった一人で歴史を変えた男

先ほど紹介したように、朝倉義景を攻めるため 1570 年に金ヶ崎(かねがさき、現在の福井県敦賀市)まで攻め込んだ際、妹の婿(むこ)である浅井長政が信長を裏切って攻め寄せました。このままでは挟み撃ちにあうところでしたが、信長は機転を利かせてわずかな手勢で京都まで一気に逃げ切り、九死に一生を得ました。

通常であれば、それまでの軍功を惜しんで立ち往生するところを、自分の生命の方が大事と冷静に判断した信長の的確な判断でした。後に天下を取った豊臣秀吉が、信長を評して「兵 5,000 人のうち 4,900 人が戦死しても、残りの 100 人の中に信長公はきっとおられる」と語っています。

このような「逃げ上手」であるうえに、諜報(ちょうほう)、いわゆるスパイの能力も抜きん出していた信長ですから、自己の暗殺計画が立てられていれば、必ず事前に察知して、逃げおおせた可能性が極めて高いのです。

また、本能寺の変が起きたのは旧暦の 6 月 1 日の深夜でしたが、私たちが現在使っている新暦とは違い、旧暦の 1 日は必ず新月(しんげつ)であり、月の出ない完全な闇夜(やみよ)でした。

信長の暗殺を事前に計画しておらず、光秀自身が単独で行動し、さらに闇夜であったがゆえに、光秀は信長に気づかれず、また逃げられることもなく討ち果たすことが可能だったのです。

しかし、光秀は信長を討つことは出来ましたが、単独で行動に及んだゆえに、結局は光秀に味方をしようとする武將は現れませんでした。そのうえ、中国地方から常識で考えられないスピードで「大返(おおがえ)し」してきた秀吉軍と、京都の山崎(やまざき)で戦うことになりました。

6 月 12 日、光秀軍を兵力で上回る秀吉軍は、京都と大坂を結ぶ要衝(ようしゅう)である天王山(てんのうざん)を抑えると、翌 13 日には光秀軍を攻め立てました。光秀もよく戦いましたが、結局は兵力の差が最後まで響いて大敗し、本拠地の坂本へ向かって敗走しました。

なお、天王山を抑えたことで秀吉軍が有利になったことから、勝負を決する大事な場面のことや、勝負の分岐点のことを「天王山」というようになりました。

その後、光秀は逃げる途中で落武者狩りの農民の竹槍に刺されて致命傷を負い、死期を察して配下に首を討たせたとされていますが、生き延びて僧の天海(てんかい)となり、徳川家康に仕えたという説もあります。

いずれにせよ、山崎の戦いによって、戦国武將としての明智光秀は滅びました。信長によって引き立てられ、大名にまで出世した光秀は、その大恩ある信長を討ち取ったことで「謀反人」と呼ばれるという汚名をかぶることになってしまいました。

また、「三日天下」「洞ヶ峠」「天王山」など現代でも使用される言葉とともに、光秀の名前は、

我が国の歴史に永遠に残ることになりました。

「たった一人で歴史を変えた男」。

明智光秀という一人の人間のとった行為が、我が国の、いや世界の歴史にどれほど影響を与えたのか、はかりしれないものがあります。それだけに、謎に包まれたままの彼の行動は、いつまでも私たちの胸の中に永遠に残ることでしょう。（完）

主要参考文献：「逆説の日本史 10 戦国霸王編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379660>

YouTube 再生リスト「明智光秀」  
[https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML5Wq0xzCT-jq3CBf\\_WdFiRE](https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML5Wq0xzCT-jq3CBf_WdFiRE)

黒田裕樹の歴史講座  
<http://rocky96.blog10.fc2.com/>